

別記

要末書

- 一 不敬賤職ノ責任ヲ明ラカニシテ因ツテ其ノ禍根タル功利主義ノ絶滅ヲ期シ社
- 二 社内紛糾ヲ消シテ協行セラレタリシ
- 三 社長ノ副社長ノ名ヲ以テ不敬賤職ノ誠意ヲ東京 大阪ノ大新聞ニ發表セラ
- 四 日本主義ヲ基調トスル指導精神ヲ確立スル爲メ海務部ノ全面的革新ヲ斷行
- 五 郵船兩朗會ヲ公認セラレタリシ

右五文不ス

昭和十二年二月二十八日

郵船兩朗會

代表 日比和一

日本郵船會社社長大谷登殿

別記

聲明書

方今皇國內外、此類ノ速クハ極倉時代ノ困難、近クハ明治維新ノ大危機ニ向ヒス、カカラガハ歴史的雷火時局タルヲ痛感ス。即チ外ニハ國際關係ニ於ケル經濟的圧迫ト武ク綿綿的脅威ヲ受ケ、内ニハ外來危險恩廻ト因ツテ未ル物質至上的主義ト相錯雜シテ普ク上下民心ニ深浸浸透シ、憂愁ハ四面ニ於ケル國民生活ノ動搖不安日ニ加ハリ、今や全ク一蹶千鈞ノ際ヲ非時勢アリ。憂國士誰カ切實挽救奮然トシテ起ツク歟、モガル者アランヤ、宜シキハ我、政府當局ハ學國未來、祭政一致ノ日本精神ヲ顯揚セントシテ國體ヲ鞏固シ、其ノ及稱、首位ニ擧ガレテソノ禍國ノ根柢ニ根柢ヲ新レシメ、辯論ヲ打開セントセラル、八寶ニ時宜ニ適シ、吾人ハ均シク之ノ腔ノ鼓聲ヲ各ニガハナリ、斯ノ如キ邦歌ノ現状ニ於テ特ニ政府ノ保護ヲ受クルモノ各々其ノ業ニ忠誠シテ抽ニス、キノミナラス、領ク全國長ニ率先シテ皇室中心、日本精神ヲ規範シ、其ノ師表タラガハカラス。然レニ之ニ及シカハ日本郵船株式會社ハ近年上皇室ニ對シテ奉リ尊榮、念ニ致シタルモノアリトシテ世ニ暴露スル指彈多ク、今や將ニ國會壇上ニ紀載サレトスルニ至ル。吾等社員一同恐懼措ク所ヲ知ラス、嗚呼方感胸ニ迫リ、憤慨ニ思フハナシ。隨ハ吾等社ノ傳統ハカノ明治十八年十月四日而環海ノ邦家海運クシテ我ハ皇統ノ天威英氣ト共ニ悠久隆盛ナラシムル重責ヲ負ヒ、神州ノ一帯ニ引テ、旗ク高揚シテ、五十年有餘年再未時ニ艱難アリタルトモ、吾等社ヲ定款ノ家ヲ尽シ、國家公家、信倚ニ負ケス。社員研ニ堅實ノ士氣ト高キ風格ヲ具ヘ、披掛優秀ト定家、勵精ニ以テ斯界ノ尊故ヲ博シ米シリ。

然テ上下陸海協力、和心ニテ我國重火國策、遂行ニ當リ、全海運界ヲ善導シ、其ノ軌範トシテ嚴ニ派ハ團體精神ヲ基調トシテ、其ノ經營ヲ行ヒ、米リタルハ、彼自他者シク、認容スル所ナリ。畏ラモ上皇室ニ於テモテハ、我社算創困難、際ニ當リ、特別ノ御恩召ニシテ、全株ノ三分一（五万二千株）現在ハ上皇方存株ノ御所有ヲ賜ハレリ。當時維新日尚遠ク、徳川幕府ノ財政疲弊シ、後ク受ケテ政府大恩ノ力ヲ受ケ、此レニシテモ、其ノ資金ヲ得ル能ハカリナリ。此時ニ方我社創此ノ祥ナル天業ニ浴ヒ、其ノ向深キ御恩召ニ存ヒサニ、於テモト、吾等一同ノ深キ感激指ク能ハルト、口ナリ、今更ニ再米國家モ、又年々所捐亦、財政中ナリ七百五円ニ及巨額ノ補助金ヲ受ケ、此レニシテ、更ニ吾等社ノ擔、同國家的使命、重大ナルノ願、其ノ力ヲ盡ス。即チ我社ハ、飯上ノ如ク、特殊恩賜、恩恩ニ浴シ、米レリ、此レニシテ、重大ナル報恩ノ念ヲ忘レ、皇ニ致シ、皇恩ノ隆ニ致シ、